

奥田亡羊歌集『男歌男』

佐藤モ二カ

父性のさびしき

『男歌男』は奥田亡羊の第二歌集である。第五十二回歌人協会賞を受賞した第一歌集『亡羊』から十年ぶりの、待望の歌集だ。

一読の後、道化師が自由自在に玉乗りや空中ブランコなどの曲芸を観客に披露する姿が脳裏に浮かんだ。昭和四十二年生まれの奥田は五十歳。ちょうど今年歌集を上梓した松村正直や大松達知と同世代になる。やはり彼らと同じように、職業詠や家族詠などが本歌集に収められている。

- ・踊り場に掛かる写真のキャプションを読む
- ・みつつ書きし我と出会いぬ
- ・植林のような仕事か映像は五十年後に意味あらばよし
- ・渋谷交差点に赤べこの首ゆれいるを美しく撮るこの世の終わり
- ・一首目、踊り場に掛かる写真のキャプションを書いたのはかつての自分、その自

分と時を経て再会する歌。二首目、「五十年後に意味あらばよし」と自らに言いかけせる。私達の日々の仕事はまさに「植林のよう」で、その効果も実績も見えにくく、仕事の意味を見出したい。その焦りや不安、やるせなさを打ち消すかのように、自身に勝負は五十年後なのだと言いきかせる。

このような現実的な歌がある一方で、奥田は現実を現実のまま詠むことを（そして、読まれることを）拒絶するかのごとく、あたかも芝居や童話の登場人物さながら、作中で愚かな男を演じる。例えば、以下のような歌に見られる、

- ・へそに土を盛りて葎を咲かせたりぼくはやさしい男でしたよ
- ・逃げてゆく子らの背中が見えるから鬼なんだろうぼくはおそらく
- ・一首目のへそに土を盛りて葎を咲かせるという非現実的な「ぼく」、二首目のあたかも子らの鬼であるという「ぼく」。いずれもとぼけた味わいが持ち味になっている。
- ・全て演じきれぬわけもなく、所々作者らしさが姿を現す。例えば、こんな家族詠で

ある。

- ・たまにしか会えない父は遠く来て子の玉入れの入れぬを見つ
- ・ひらひらと子は走るもの石積み古墳のめぐりコスモスの咲く
- ・子を胸に歩めばわれの知らざりしやさしさを見ず人も世界も

一首目、せっかくのハレの場なのに、子どもの再会の場合なのに、子のうまく玉入れが決まらないという間の悪さ。二首目、まだ体重の軽い子の走る様子を「ひらひら」というオノマトペで表現し、秀逸。三首目、普段はただすれ違ふのみの人々も子を抱く自分に笑いかけてくる。

- ・おやすみを覚えてる子が手を振りぬテレビ、くつした、父、父の椅子
- ・子がおやすみなさいと言い、リビングからひと足先に寝室に向かう様子。下句の「テレビ、くつした、父、父の椅子」にさびしさがある。テレビを消し、くつしたを脱ぎ、父と手を触れ、さらには父の椅子にも手を振る。いつも行動を共にし、慕われる母と異なり、父というのは絶えず子とすれ違ふ。この父性のさびしさが余韻に残る。